

日本手話における韻律要素の文法化について 「遅さ」と「静止挿入」

市田 泰弘

国立身体障害者リハビリテーションセンター

あらまし：日本手話における韻律要素である「遅さ」と「静止挿入」が、図像性をもつ領域（CL）ではどのような意味をもち、それが、図像性をもたない領域（フローズン）にどのように引き継がれ、文法化しているかを明らかにする。

キーワード：日本手話、韻律要素、図像性、文法化

1. はじめに

1.1 CL とフローズン

CL (classifier construction) とは、手話の図像的な領域で、構成要素である手型、位置、運動は、それぞれ図像的な意味をもつ。一方、フローズン (frozen lexicon) は、図像性を利用せず、経済性を優先した領域で、手型、位置、運動はそれぞれ意味をもたない。

CL における手の運動は、「動き (motion)」のほか、「存在 (position)」「広がり (extension)」「様態 (manner)」という図像的な意味をもっている (Engberg-Pederson, 1993; Emmorey, 2002)。一般に韻律要素として扱われる「速度」や「静止」は、CL においては、「様態」に含まれる特徴である。(以下、「物体の動き (motion)」を「動き」、「手の運動 (movement)」を「運動」として区別する)

1.2 「張り」

CL において、「存在」は小さな運動 ("dot")、「広がり」は非利き手を添えるか、両手を対照的に動かす運動によって表されるが、それらは「動き」を表す運動とは運動の「質」においても異なっている。この質の違いは「張り」の有無として記述できる。すなわち、「コントロールされた動き」は [+ 張] という特徴をもち、「存在」「広がり」は [- 張] という特徴をもつ。したがって、運動の種類としては同じ形をもつ「小さな動き」と「存在」（「カップを置く」と「カップがある」）、「左右対称の動き」と「広がり」（「床が開く」と「平面の広がり」）は、運動の質によって区別される。

なお、「コントロールされていない動き」は、「動き」でありながら [+ 張] ではなく [- 張] という

特徴をもつ (例：「車をバックさせる」と「車が後ろへ下がる」)。動きが [- 張] で表される場合は、片手の大きな運動や両手非対称の運動をもつが、そのことによって、それが「動き」であって「存在」や「広がり」ではないことが示されている。

1.3 「張り」と「強さ」の関係

「張り」の有無は、手指の運動にのみ現れる特徴で、上半身に現れる特徴である「強さ」とは別のものである。

CL においては、上半身で表される指示物と、手指で表される指示物が異なる場合があるが、上半身の「強さ」は「強い意志や力」という意味をもち、手指の「張り」がもつ「コントロールされた動き」という意味との関係から、[+ 張、+ 強] あるいは [- 張、- 強] の組み合わせは、上半身と手指の指示物が同一であることを強く示唆し、逆に [+ 張、- 強] あるいは [- 張、+ 強] は、両者の指示物が同一ではないことを表すことになる (もちろん、上半身と手指の物理的距離や、両者の動きの一体感、顔の表情なども関連している。小藺江ほか (2000) では、CL を動作主系と対象系に分類したが、それは上半身と手指が表す指示物の同一性をめぐる分類である)。

また、フローズンにおいては、「張り」は語彙レベルの特徴であるのに対して、「強さ」は文法レベルの特徴であり、その共起関係に意味的な制限はない。

2. CL における韻律要素

以下、「動き」と「広がり」を表す運動を中心に、「遅さ」と「静止挿入」という韻律要素がどのような意味をもっているか記述する (図 1 参照)。

2.1 「遅さ」

CLにおける[+遅]という特徴は、「動き」を表す運動では「動きの遅さ」を表すが、「広がり」を表す運動では「広がり大きさ」を(「運動の大きさ」に代わって)表すことができる(例:「高いビル」)。また、「物体の数の多さ」を「存在を表す運動の移動しながらの反復の多さ」に代わって表すこともできる(例:「壁面に本がたくさん並んでいる」)。

なお、「動き」を表す運動において、「遅さ」とは反対の意味である「速さ」を表すためには、[+速]ではなく、「語頭への静止挿入」が用いられる。

2.2 「語頭への静止挿入」

「語頭への静止挿入」は、「動き」を表す運動では文字通りの意味(「初めに静止があって、そのあと動く」)だけでなく、「運動の速さ」によらずに「動きの速さ」を表すことができ、「広がり」を表す運動では「均一性」や「網羅性」を表す。ただし、「広がり」を表す運動の語頭に「静止」を挿入するには、「程度の大きさ」を意味する副詞との共起と、それに伴う[+張]への変化(「緩み運動の張り化」)を必要とする(後述)。

2.3 「語末への静止挿入」

「語末への静止挿入」の文字通りの意味は、「動き」を表す運動では「動き終わった後、静止する」、「広がり」を表す運動では「広がり限りがある」ということである(例:「ボタンを押し続ける」「ある長さの管/ずっと続く管」。なお、「存在」を表す運動では「存在し続ける」という意味をもつ)。

一方で、「語末への静止挿入」は「動きの反復の多さ」を(「運動の反復の多さ」に代わって)表すことができる(このことは、「物体の数の多さ」を「広がり」で表すことができるのと平行している)。ただし、「語末の静止挿入」が「動きの反復」を表すには、「張りの緩み化」が必要とされる(「程度の大きさ」を意味する副詞との共起については後述)。

2.4 「反復」と「緩み化」

動きの反復が一連の動きとして一塊に捉えられる場合には、[+張]の特徴をもつ運動を「緩み化」して[-張]とし、「小さな運動」にすることで、反復を一つの運動の中に内在させることができる

(例:「ボタンを押す」「何度かボタンを押す」「何度もボタンを押す」)。そして、このような運動だけが、「語末への静止挿入」で「動きの反復の多さ」を表すことができる(「語末への静止挿入」は、話者の実感としては「小刻みな反復」のように感じる場合もある。また、松本(2001)が「流すようにする」と表現したものにあたるものと考えられる)。

2.4 「程度の大きさ」を表す副詞と「張り化」

「程度の大きさ」を表す、眉と目のふるまいによる副詞が、「動き」を表す運動と共起する場合は、[+遅さ]か[+語頭の静止]を要求する(意味としては、文字通り、「力の強さ」や「抵抗の大きさ」を表す)。同じ副詞が「広がり」を表す運動と共起した場合は、「輪郭の明確さ」「密度の高さ」を表し、[+遅さ]か[+語頭の静止]に加えて、「緩み運動の張り化」を要求する。結果として、「強い抵抗を受けながら、強い力で床が開く」と「たくさんのもものがぎっしり並んでいる」は形式上の区別がなくなる。

また、「一連の動きの反復の多さ」を表す「緩み化」した「静止挿入」との共起においても、再び「張り化」することが要求されるので、「強い力で押し続ける」と「間をおかずに何度も押す」の形式上の区別もない。

3. フローズンにおける韻律要素

CLにおいて、「遅さ」や「静止挿入」は、その運動によって表される文字通りの意味だけでなく、「遅さ」は「運動の長さ」の代わりに「広がり大きさ」を、「語頭への静止挿入」は「運動の速さ」の代わりに「動きの速さ」を、「語末への静止挿入」は「運動の反復の多さ」の代わりに「反復の多さ」を表した。

「遅さ」「静止挿入」のうち、「文字通りの意味」を表すものは、もっとも図像性が高く、語彙レベルでは基本的に図像性を利用しないフローズンにおいては用いられない(動詞のアスペクト表現において、フローズンが“再分析”されて、運動の図像性が利用される場合は除く)。

それに対して、文字通りの意味を表さない「遅さ」「静止挿入」は、フローズンにおいて“文法的”に用いられる。以下、フローズンにおける「遅さ」「静止挿入」の文法化について述べる。

3.1 フローズンにおける「張り」

まず、CLにおいては、図像的な意味を表していた「張り」のフローズンにおける位置について述べておこう。

フローズンにおいては、「張り」は図像的な意味をもたない。しかし、フローズンはふつうCLが語彙化することによって生まれるため、CLにおける「動き」と「広がり」をめぐる運動の種類と質の対立は、フローズンにもその起源的な対立として受け継がれている。たとえば、瞬間動詞は[+張]の特徴をもつ大きな運動、継続動詞は[-張]の特徴をもつ反復を内在した小さな運動、形容詞は[-張]の特徴をもつ大きな運動であることが多いというような傾向は明らかに存在する。

3.2 「遅さ」

「広がり大きさ」という意味と、副詞共起による「輪郭の明確さ」、あるいは「密度の高さ」という意味は、そのままフローズンにも受け継がれており、形容詞への修飾と、動詞の複数性標示として現われる。

3.3 「語頭への静止挿入」

「動きの速さ」という意味は、フローズンの動詞にも引き継がれている。また、副詞共起による動詞の「抵抗の大きさ」、形容詞の「網羅性」「均質性」も同様である。

3.4 「語末への静止挿入」

CLにおける文字通りの意味のうち、「継続」という意味だけは、フローズン動詞の一部にアスペクト表現として引き継がれている。また、「反復の多さ」と、副詞共起による「反復の密度の高さ」は、フローズン動詞においても用いられる。

3.5 「張り化」と音韻規則の適用

副詞が共起すると、[-張]の特徴をもつ語が「張り化」するのは、フローズンでも同様である。だが、次のことを指摘しておくことは重要であろう。

フローズンにおいては、見かけ上の手型や両手の関係などは、「張り」の有無にもとづいて決定される。たとえば、けれども と ない は「張り」の有無によって対立しており、見かけ上の手型の違

いや両手が片手かの違いは、[+張]であれば指の間をつけた[B]手型で片手、[-張]であれば指の間を開いた[5]手型で両手、という規則が適用された結果にすぎない。もし、その両者に「程度の大きさ」を意味する副詞が共起し、「語頭への静止挿入」が生じて、[-張]の特徴をもつ ない に「張り化」が起こったとしよう。それでも、両者が同型になることはない。見かけ上の手型や両手が片手かの違いは、語彙的な「張り」の有無の指定によって決まるのであり、文法的な「張り化」はそれらを変えることはないのである（音韻規則の適用に順序が存在するということである）。

3.6 形容詞を修飾する要素としての韻律要素

きれい や 黒 などの形容詞は、「程度の大きさ」を意味する副詞が共起する際、「遅さ」と「語頭への静止挿入」という二つの表現のバリエーションをもつことになる（もちろん、二つの表現の意味の違いは、CLにおける「輪郭の明確さ」と「網羅性・均質性」という両者の意味の違いに起因する）。

なお、これとは別に、「語の反復」という方略が、形容詞の意味を強める働きをする場合があり、その場合はもっとバリエーションが増えることになる。たとえば、甲を前に向けたL手型を横に引く ひどい という語彙([+張]の特徴をもつが、形容詞である)には、程度を強める言い方として、「緩み化した反復」、その反復の多さに代わる「語末への静止挿入」、さらにそれが副詞共起に伴って「張り化」したものの、そして、「遅さ」と「語頭への静止挿入」という5つの異なる表現がある。

3.7 動詞の語形変化に現われる韻律要素

動詞の中には、対象あるいは目標の複数性を語形変化によって明示するものがある（質問する 作る など）。その際にも、CLにおいて物体の複数性を反復ではなく広がりとして表現したのと同じように、移動しながら語を反復する代わりに、動詞の語末の静止の状態のまま横へ移動させることで表すことができる。この対象あるいは目標の複数性を示す移動の運動は、言ってみれば「広がり」を表す運動であり、無標では[-張]の特徴をもち、[+遅さ]で「数の多さ」を表す。また、「程度の大きさ」を意味する副詞が共起すると「張り化」し、「遅さ」と「語頭への静止挿入」のどちらかが要求される。

そして、意味的にも「密度の高さ」と「網羅性」という意味が、そのまま受け継がれる。

4. おわりに

日本手話における「遅さ」と「静止挿入」という韻律要素について、その意味と文法化について述べた。「遅さ」と「静止挿入」が図像的領域（CL）においてもつ意味のうち、もっとも図像性の高い“文字通りの意味”は、フローズンには受け継がれない。それに対して、図像性の低い意味については、フローズンにそのまま受け継がれ、動詞のアスペクト標示、動詞や形容詞への修飾、動詞の複数性の標示として文法化していることが明らかになった。

なお、動詞のアスペクト表現において、フローズンが“再分析”されて、運動の図像性が利用される際に「遅さ」や「静止挿入」が用いられるケースについては、今回は取り上げなかった。しかし、その

ような現象が、手話言語の全体像を明らかにする上では等しく重要であるのは言うまでもない。今後の課題である。

参考文献

Emmorey, K. (2002). *Language, Cognition, and the Brain: Insights from Sign Language Research*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Engberg-Pedersen, E. (1993). *Space in Danish Sign Language: The Meaning and Morphosyntax of the Use of Space in a Visual Language*. Hamburg, Germany: Signum Verlag.

小園江聡・木村晴美・芳仲愛子・市田泰弘（2000）「日本手話におけるロールシフト」『日本手話学会第26回大会予稿集』pp8-11、日本手話学会）

松本晶行（2001）『実感的手話文法試論』全日本ろうあ連盟

表 1

韻律要素	CL		フローズン	
	動きを表す運動	広がりを表す運動	形容詞の強調	動詞の複数性標示
[+遅さ]	(動きの遅さ)	広がり・数の大きさ	広がり・数の大きさ	数の大きさ
[+遅さ] + ad	(動きの遅さを生む抵抗の大きさ)	輪郭の明確さ、密度の高さ	輪郭の明確さ、密度の高さ	密度の高さ
[+語頭静止]	動きの速さ			
[+語頭静止] + ad	(動きの最初での抵抗の大きさ)	均一性、網羅性	均一性、網羅性	網羅性
[+語末静止]	反復の多さ	(広がりには限りがある)	強調	反復の多さ
[+語末静止] + ad	反復の密度の高さ	(広がりを作る)	さらなる強調	反復の密度の高さ

ゴシックは [+張] 網掛けは「張り化」「緩み化」、+ ad は「程度の大きさを意味する副詞の共起」を示す